

改糝爲木旁、謂積柴水中、令魚依之止息、字从木也、而舍人李巡皆云、以米投水中、養魚曰糝、似其說各異、不知積柴而投米焉、非有二事、以其米故曰糝、以其用柴、或製字作深、深見淮南書、糝皆魏晉間也、
作也、

〔類聚名義抄〕糝七素感反、美糝、ト糝古 糝正 〔同八〕餗今正音速餗

〔倭訓栞前編九〕こながき 倭名抄に餗をよめり、又糝をよめり、字書に糝以米和羹也といひ、餗糝

也といへば、粉菜搔雜たるの義、米粉をもて菜羹に和する也、杜子美が糝徑楊花といへるも、米粉

をかくるが如きをいふ也、新撰字鏡に臄もよめり、

〔下學集下〕飲食 糝増水 糝也

〔運歩色葉集〕糝 糝増水

〔尺素往來〕若菜醬水者、玉糝羹 人日之俗儀、七穀烹粥者、上元之世禮、

〔新撰類聚往來上〕其羹名者、付煎點

剖糝

〔大上膳御名之事〕女房ことば

一ぞうすい おみそう。

〔東雅十二〕飲食 粥略 凡物の粘するを、中 下學集に、増水の字讀でゾウスイといひ糝也と注せり、其

用ひし所の字によりて見れば、粥にして水を増すの義也、されどその注せし所によるに、今も民間

間にして、菜蔬の類を鹽水をもて煮熟したるに、米麥等の粉を和し、即今増水といふもの、始此

ものより起りしなるべし、或説に即今ゾウスイといふものは、即雜炊の字の音をもて呼びし也、

増水とする事しかるべからずといふ、不知詳、

〔倭訓栞後編十六〕みそうづ 著聞集にみゆ、味醬水の義にて、今いふ雜炊にや、砂石集に、よひく

にもちひみそうづいとなみてといふ連歌あり、みそうがゆといふも味噌粥なるべし、